

Y3-06

ハイチ共和国コレラ救援事業活動報告 (ERU初動～第3班)

大阪赤十字病院 国際医療救援部
喜田たろう

中米カリブ海の島国ハイチで発生したコレラ・アウトブレイクにより、2010年11月下旬には、72,017人が感染、1,648人の死亡が報告されていた。

ハイチ赤十字社と国際赤十字赤新月社連盟（連盟）からの基礎保健ERU（BHC - ERU）派遣要請に対し、日本赤十字社（日赤）は、コレラ治療センター（CTC）を運営すべく、BHC - ERU 派遣を決定した。演者は本事業において2010年11月16日から翌年2月22日までERUチームリーダーとして派遣される機会を得たので、期間中の活動内容および課題について報告する。

日赤ERUは、赤十字国際委員会（ICRC）からの要請に基づき、コレラの集団発生が認められていた首都刑務所に医療スタッフを派遣して、ICRC医療チームが到着するまでの期間、収容者への治療を行った。さらに連盟が準備を進めていたCTC設置に協力し、現地スタッフに対するコレラ治療に関する講習会の開催、連盟セキュリティやロジスティクス部門などと協力して、設置場所の選定や施設レイアウト策定などを実施した。その後、西県カルフルでのカナダ赤十字社主導のCTC設置が決定された後は、同CTCへ医療スタッフを派遣し、同社と合同運営を行った。

またイギリス赤十字社（BRC）との合同調査により、南県ポルタピマンにCTC設置の必要性が認められたため、閉鎖された国立病院建物を改装してCTCを設置した。給水衛生設備の設置を含む施設の改修をBRCが担当し、施設運営は日赤が担当した。医師・看護師を含む60名以上の現地スタッフを雇用し、公称40床のCTCとなった。同地域での救急搬送とコミュニティでの啓発活動をBRCが担当し、人口約12万人の南県西海岸一帯を診療圏として活動を行った。

Y3-07

ハイチ共和国コレラ救援活動報告 ～技術要員の活動～

名古屋第二赤十字病院 臨床工学科¹⁾
名古屋第二赤十字病院 国際医療救援部²⁾
新居 優貴¹⁾、山田 悌士¹⁾、伊藤 明子²⁾、
杉本 憲治²⁾

日本赤十字社（日赤）のハイチ地震後のコレラ救援事業に対し、技術要員として参加したので報告する。地震時に使用した機材を再使用し、コレラ対応を行うことになった。しかし、多くの機材は既に地震の救援活動で使用しており、修理や整備を行わなければならなかった。また一部の機材や工具は紛失した状態であった。活動当初は首都近郊でコレラ治療センター（CTC）を設置する計画であったが、政府の許可、地域住民の理解、セキュリティなどの問題により設置活動が行えなかったため、他国の赤十字やMSFのCTCを訪問し、浄水方法、感染コントロール、汚水処理などの情報収集やCTCの設計図の作成等を行った。その後、カナダ赤十字社やイギリス赤十字社と共同で首都近郊と南県の2箇所でCTCの設置に携わり、電気設備の設置、ORSや塩素水の作成、現地スタッフの指導などを行った。ハイチは地下水が豊富であり、首都近郊では大量の水を得るのは容易であったが、南県のCTC内では十分な水が得られない、また水質不良などの問題があった。今回の救援活動を通してスプレイヤーの存在、患者の動線管理、廃液対策などの感染拡大防止対策を学ぶことができた。技術要員の活動においてコレラ救援のような浄水活動、感染防止対策は特殊であり経験者も少ないため、今後は知識や経験をフィードバックし人材育成に反映させるかが課題と考える。